

經典餘師
詩經
五

口 11

1029

33



祈父之什三之三

祈父三章

祈父予王之爪牙胡轉予于恤靡所

經典餘市

詩經卷之五

○祈父之什三之三

祈父の更に次より出たり

之の更に

祈父三章

の詩に戰役の更に次より出たり

軍士より天子の都の四方より土地を畿内より祈父の字圻の字いづれも畿の字に同意なり父の字も甫の字といふなりトとして男と稱してより甫といふなり祈父といふ畿内の軍役と掌取人といふなり

祈父予王之爪牙胡轉予于恤靡所

詩經卷之五

恤于轉ど止居
所靡

止居

軍士の天子の膝下にて祈父の支配下にて

祈父予ハ王之
爪士胡ど予と

恤于轉ど底止
所靡

祈父曾ハ聰な
ら不胡ど予と

祈父曾不聰胡轉予于恤有母之尸

恤于轉ど母之養
と尸有

養

祈父の宮はすくなくとも乞ふるものなり

白駒四章

皎々ハ白駒
我場の苗と食
之と繫之と維
て以て今朝と

白駒四章

賢者の土地をあらうと

皎皎白駒食我場苗繫之維之以永

永^とん謂^い所^し伊^い
人^{ひと}焉^や於^おて道^{みち}
遙^{とほ}く

皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ
我^{われ}場^ばの藿^{くわ}と食^く
之^{これ}と繫^け之^{これ}と維^ゐ
以^{もつ}て今^{いま}夕^{ゆふ}と

永^とん謂^い所^し伊^い
人^{ひと}焉^や於^おて嘉^か
客^{きやく}く

皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ
賁^{ひん}然^{ぜん}く來^き
思^し爾^にと公^{こう}と
爾^にと侯^{こう}と逸^{いつ}

豫^よ期^き無^な人^{ひと}爾^に
優^{ゆう}游^{ゆう}と慎^{しん}爾^に
の適^{てき}思^しと勉^めく

皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ
彼^か空^{くう}谷^こに在^あ生^{せい}
蜀^{しやく}一^{いつ}束^{そく}其^{その}人^{ひと}玉^{ぎよく}
の如^{ごと}く爾^にの音^{おん}
と金^{きん}玉^{ぎよく}と而^{して}還^{かへ}
心^{こころ}有^あと母^{はは}

今朝所謂伊人於烏道遙

賢^{けん}者^{しや}留^{とど}けり白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
とと留^{とど}けり白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
とと留^{とど}けり白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
とと留^{とど}けり白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ

皎皎白駒食我場藿繫之維之以永

今夕所謂伊人於烏嘉客

皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ
皎^{きう}々^々白^{はく}駒^こ皎^{きう}々^々駒^こに乘^{のり}て立^たこ

來思爾公爾侯逸豫無期慎爾優游

勉爾適思

勉^め爾^に適^{てき}思^し
勉^め爾^に適^{てき}思^し
勉^め爾^に適^{てき}思^し
勉^め爾^に適^{てき}思^し

皎皎白駒在彼空

谷生蜀一束其人如玉爾音

而有遐心

而^{して}有^あ遐^{とほ}心^{こころ}
而^{して}有^あ遐^{とほ}心^{こころ}
而^{して}有^あ遐^{とほ}心^{こころ}
而^{して}有^あ遐^{とほ}心^{こころ}

黄鳥三章

黄鳥々々穀于
集々々々無我栗
と啄々々々無此
邦之人我肯
て穀々々々不言
旋言々々歸て
我邦族々復ん

黄鳥三章

松国と立いで他国

へゆきしりしりとの所も住むべ
故里よりんしとをばむ黄鳥とし
よせくかくい
いささしり

黄鳥々々穀于
集々々々無我栗
と啄々々々無此
邦之人我肯
て穀々々々不言
旋言々々歸て
我邦族々復ん

黄鳥黄鳥無集于穀無啄我栗此邦
之人不我肯穀言旋言歸復我邦族

黄鳥々々桑于
集々々々無我梁
と啄々々々無此
邦之人我肯
て穀々々々不言
旋言々々歸て
我邦族々復ん

黄鳥黄鳥無集于桑無啄我
穀々々々言と旋歸て
我邦族々復ん

邦之人與々明
ふと可不言
旋言々々歸て我
諸兄々復ん

梁此邦之人不可與明言旋言歸復
我諸兄

黄鳥々々相于
集々々々無我黍
と啄々々々無此
邦之人與々處
と可不言
旋言々々歸て我諸
父々復ん

黄鳥黄鳥無集于相無啄我黍此邦之人不可
與處言旋言歸復我諸父

黄鳥々々相于
集々々々無我黍
と啄々々々無此
邦之人與々處
と可不言
旋言々々歸て我諸
父々復ん

黄鳥黄鳥無集于相無啄我黍此邦之人不可
與處言旋言歸復我諸父

黄鳥々々相于
集々々々無我黍
と啄々々々無此
邦之人與々處
と可不言
旋言々々歸て我諸
父々復ん

黄鳥黄鳥無集于相無啄我黍此邦之人不可
與處言旋言歸復我諸父

黄鳥々々相于
集々々々無我黍
と啄々々々無此
邦之人與々處
と可不言
旋言々々歸て我諸
父々復ん

黄鳥黄鳥無集于相無啄我黍此邦之人不可
與處言旋言歸復我諸父

我行其野三章

我行其野三章

我行其野三章

我行其野三章

我行其野其野蔽芾其標昏姻之故言爾就居爾不我畜復我邦家家之復人

我行其野其野言采其遂昏姻之故言爾就宿爾不

作歸人とをりい

我行其野蔽芾其標昏姻之故言就

爾居爾不我畜復我邦家

てろの野の標木の蔽芾の昏姻の

と畜養の家の就る人情の

又家のいふとすくすく我邦

言采其遂昏姻之故言就爾宿爾不

我畜言歸思復

いれく食物の草と食とすくすく野

情のうすれとをりい復人

○我行其野言采其菑不思

舊姻求我新特成不以富亦祇以異

菑の離陸をりい思ひて

るり特匹を求て之とあ

すくすく亦祇以て富と

以て

斯于九章

天子宮室と築酒宴と

と

言文卷三

秩秩斯干
幽幽南山
如竹苞矣
如松

茂美兄及弟美式相好美無相猶美

宮室と築つく水の干ぬぶくて秩し々々り

南ミナミの山ヤマの如ごとく

く木の子こぎのうへに
この内うちをいゝ久ひさく兄あに弟ていむつとどろ

火賣此且築室与者。西

南其言爰居爰處爰笑爰語

聖天子之廟
 樂も先祖せんぞの考かう妣はのの人ひとのの宮みや室むろ

づれも。西南よりくるもの法をいへう

戸の西より北より
 戸の東より南より

あゝしく居るしにふいふ竹天さみの説
してしらまゝくく

ツケキヤク
のキソクレ

約之習習採之

素素風雨攸除鳥鼠攸去君子攸芋

築地とて板敷の素地
閣下地とて板敷の素地

又手とて淋と榴うもり入かふのどく
くをれば本う雨風すこしの害なく

除のぞくのふりふにふり鼠ねずみ鳥とりのをぐい鼠ねずみ
とふりふすふまふくか美み々々々々高たか

大々夫の宮室も君子のまゝすべし
 華尊御威光のまゝすべし

○如跂斯翼如矢斯棘如鳥斯革

詩經卷之三

六

鳥の斯草と
如く翬の
斯飛が如く君
子の隣攸

殖殖其庭有
其極有
其正
其寢
君子の寧

如翬斯飛君子攸隣

造営のこころ高正

如く堂の四方のまわり直ぐりまわり
何ともしもつらつらとものまわりまわり

のぞくとくく鳥の毛色の鮮華し
外の外みらぐれんべん

寧其極噲噲其正噦噦其寢君子攸

寧其寢君子の寧
庭の表裏の正面
噦噦其寢君子の寢

下莞上簟乃安斯寢乃寢

乃興乃占我夢吉夢維何維熊維羆

維羆維蛇
目細りと上よりきて君

維熊男子之祥維羆維蛇女子之祥

大人占之維熊
熊羆のゆえるが男子の瑞祥
又蛇也ともなりたる女子の産る

乃生男子と生
載いち之と牀
寝載衣之
裳と衣載
之璋と弄
其注と聖々
り朱蒂斯皇
り室家君王
らん

乃生女子と生
載いち之と地

ありきのやうり山いたく出うるし陽
るるのうららのけごもの放つて外
蛇のうらつて穴はすむらりり穴を
地中うらつて陰るるの身あうく内り
乃生男子載寝之牀載衣之裳載弄
之璋其泣嗶嗶朱蒂斯皇室家君王
男子生てん之と牀の寝衣と裳と衣ど
めりて弄璋の璋と弄翫の翫と弄
とちりり天子の御衣のふくふく帯
の所いふ朱紅の皇々いりりり
誠は室家ふ君王とちりりめりり
○乃生女子載寝之地載衣

乃生男子と生
載いち之と地
寝載衣之
裳と衣載
之璋と弄
其注と聖々
り朱蒂斯皇
り室家君王
らん

之裼載弄之瓦無非無儀唯酒食是
議無父母詒惟

の成りり裼のうらつてとていりり
内のつとめとていりりうらつて
とけいりりうらつてとていりり
く女子の道い婉順とていりり
非とて論ずりりりりりりり
内の食物と心よりけりりりり
子のはちとて議する義なり
母の心羅とて論ずりりりり
さやうの心羅とて論ずりりりり

無羊四章

牧人の職を牛羊の官と
牧養官なり

人畜生て功業の成就りて牛羊の官と

のぶくた敷よりし
先宗

の義なり

誰謂爾無羊三百維羣誰謂爾無牛

九十其特爾羊來思其角濊濊爾牛

來思其耳濕濕

羊も二百の數や無といふや羊一群

牛も毛の黄や黒と唇の白なり

とこれに中々角と觸人ととる人の害

牛の角濊濊と病なりその耳

誰謂爾無羊三百維羣
誰謂爾無九十其特
爾の羊來思其角濊濊
爾の牛來思其耳濕

或降於阿或飲於池或寢

或訛爾牧來思何蓐何筥或負其餼

三十維物爾牲則具

道の阿の降の飲の池の

又訛の蓐の筥の負の餼

又訛の蓐の筥の負の餼

又訛の蓐の筥の負の餼

○爾牧來思以薪以

或阿于降或
池于飲或
寢或訛爾
牧來思何
蓐何筥何
負三十維
物爾牲則
具

爾の牧來思以薪以

經

詩經

乙

一以て雌一以て雄
來思爾之羊
騫不崩不之
麾一肱一以て
と昇く來て既
と升

牧人乃夢
衆維魚
旗人
實維豐年
維旗室家
漆

蒸以雌以雄爾羊來思矜矜兢兢不
騫不崩麾之以肱畢來既升

雌雄大小
人乃夢
衆維魚
旗人
實維豐年
維旗室家
漆

○牧人乃夢衆維魚夫旗維旗
矣夫人占之衆維魚夫實維豐年旗

維旗夫室家漆漆

天地氣運の和合するゆへ
牧人乃夢衆維魚夫旗維旗
矣夫人占之衆維魚夫實維豐年旗
維旗夫室家漆漆

節南山十章

經典餘師

詩經卷之五

節南山十章

大夫家父の作

君尹氏の政務をく乱と引
 下尹氏の政務をく乱と引
 賢臣尹吉甫の後裔なり
 當時三公の

節彼南山維石巖巖赫赫師尹民具
 維石巖巖赫赫師尹民具
 憂心惓惓如也
 敢て戲談せ不
 國既卒斬
 何と用て監不

節彼南山維石巖巖赫赫師尹民具
 爾瞻憂心惓惓不敢戲談國既卒斬
 何用不監
 當時の大帥官の尹氏の
 赫々いふふふふ
 終南の山の麓に
 高佐に
 政務の
 胸と惓惓たるものども憂心惓惓たるものども

節彼南山有實其猗赫赫師尹不平
 實て其猗赫赫
 師尹不平何
 謂人天の方
 嘉すも無惓て
 懲嗟すも莫

節彼南山有實其猗赫赫師尹不平
 謂何天方薦瘥喪亂弘多民言無嘉
 惜莫懲嗟
 南山の草木谷々たり
 枝葉長きなり
 尹氏の家
 の人不平の心とて何ぞ
 天の神明いふふふ何ぞ
 亂の疾薦瘥弘多とて怨言いふふ
 民すも嘉樂とて怨言いふふ
 且夕に惓て心と懲嗟
 尹

尹氏大師維周
之氏國之均と
秉四方是維天
子不俾昊天不
迷不俾昊天不
弔不弔我師
師と空ぶ不

躬弗親弗
弗任弗
子と問く勿
式て夷ん式て

已う小人の殆
烟亞則無
膺仕す

昊天不
此鞠訕と降
昊天惠不此大
如届民の心
と関俾君子如

經典餘師

詩經卷之五

十二

氏大師維周之氏秉國之均四方是

維天子是毘俾民不迷不弔昊天不

宜定我師尹氏大師の官なり大

師の任なり
天子の毗りる方民迷惑を維
ち天子の毗りる方民迷惑を維
野天の弔る天罰を不仁魚道

○弗躬弗親庶民弗
信弗問弗仕勿罔君子式夷式已無

小人殆瑣瑣姻亞則無膺仕下民

臨の身分
親く手つけ心入る
衆のうり又問ふ海よと信
ふけ仕とつちがりのと用
るふす君子とすとの罔期

何じや心と式夷ん
殆らうりて泥る小人の
ののの孫膺ん小人の
官高く孫膺ん小人の

○昊天不傭降此鞠訕昊天不惠
降此大戾君子如届俾民心関君子

夷之惡怒是違

昊天不弔不亂
定有靡式
月斯生民
寧不俾
憂心醒
誰國成

如夷惡怒是違

如夷惡怒是違
○不弔昊天亂靡有定式
斯生俾民不寧憂心如醒誰美國成

不自為政卒勞百姓

不自為政卒勞百姓
四牡四牡項領我瞻四方
○駕彼

彼四牡之駕
壯項領我四方
瞻彼感
聘

昊天平こころなく不ず
我王寧こころなく不ず
其心こころ懲こり不ず覆くわ
て其正ただと怨うらむ

方茂爾惡相爾矛矣既夷既懌如相
醕矣ハルカ
小人のもつちり
なりしも然いふこと
昨はこれのいく

相醕あひありて酒宴さけゑんの席せきを金かねに

昊天不平我王不寧不懲其心覆怨其正

いんどうや
○家父作誦以究王

訥式訛爾心以玄萬邦
の家父忠義
の召臣なり

の中へ、その詩論の誦を傳へて、王道と究世

[illegible]

の邦々を安んずるに心を尽く民と畜

[illegible]

正月十三章

寺經卷之五

十四

一と論大夫敷て天変ふりて

詞云

正月繁霜我心憂傷民之訛言亦孔之將念我獨兮憂心京々哀我小心以て痒

正月繁霜我心憂傷民之訛言亦孔

言亦孔之將念我獨兮

之將念我獨兮憂心京々哀我小心

憂心京々哀我小心以て痒

癢憂以痒

天のいりて種々の寒なり四月で

正陽の月

るるに邪知奸佞の民の心と傷憂志

れまがて上下の人とまどつたり

之と心も憂て京々哀と心と小

之と心も憂て京々哀と心と小

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

父母我と生胡

父母我

彼中林と瞻みば
侯薪侯蒸民今
方また殆おほく天と
視み夢々ゆめゆめ
既すで克定よくさだす
有人ある勝弗うけざると
靡皇みこう上帝しやうてい
有伊誰あるいと云
憎人にくしみ

山と蓋卑と謂
岡爲陵爲民之
訛言寧之と懲
と莫彼故老と
名之と占夢と
訊具と曰予聖
と誰と鳥之雌
雄と矢口

經典餘師

待經卷之五

臣僕良我人斯于何從祿瞻烏爰止
于誰之屋

の役アに我々も無祿なり。この國の亡滅な
 んとすりとせよ。無辜のものも今臣僕
 とし、罪人の別名たりむ。いひては僕
 と畫カキの僕と名づけて公用し、夜に圜
 に入るとり哀さうれ我國の人が于
 何とぞと辱ウチは誰か屋といふ止まりとやん
 と身ミを引くべし。
 ○瞻彼中林侯新侯
 蒸民今方殆視天夢夢既克有定靡
 人弗勝有皇上帝伊誰云憎
 中林の瞻の

大木茂樹のわづらひたるく
 薪蒸ものわりとん朝廷政務の
 場所と有徳人あるくして小人高位
 人志氣と得て一時はらんるるん天
 道も克人よ勝その身よ罰とわづらひ
 天道克人よ勝その身よ罰とわづらひ
 上^レ帝の御徳いほに皇大いして誰
 と憎めよといふれどに悪心と
 謂山蓋卑爲岡爲陵民
 之訛言寧莫之懲名彼故老訊之占
 夢具曰予聖誰知烏之雌雄

心之憂美之
 結或如
 今茲之正胡
 厲之方揚
 寧之滅或
 赫々々々
 褒姒之威

も特て莞々然と好むもの天の物とわく
 2匹我々の道にぞと天よとて抗し
 天子不明とてふれり我よ克する
 彼初め止む我とて我よ克する
 今や我とて我よ克する
 今や我とて我よ克する

心之憂美如或結之今茲之正胡爲
 厲美燎之方揚寧或滅之赫赫宗周
 褒姒威之

茲は國家の正燎田とて將場の草木と
 焼て火のく揚寧も滅
 代の宗も一人の美女の褒姒が爲る
 幽王の女の

終其永懷又
 又陰雨
 其車既
 載乃爾の輔
 と棄載り爾の
 載と輸て伯
 予と助と將

終其永懷又
 終其永懷又
 終其永懷又

大陰雨間て棄
 國家と治の重
 賢者の佐
 載と輸と
 載と輸と

嘉穀有其隣と
洽比と昏姻孔
と云念我獨
今憂心慙慙と

此々々々彼々
屋有穀々々々
方一穀有民今
之無祿天大
是祿と寄と
富人哀此
惻獨

十月之交八章
十月之交朔日
辛卯日之と食
す有亦孔
と之醜一彼月
と之醜一微此
今此下民亦孔
と之哀

有嘉穀洽比其隣昏姻孔云念我獨

今憂心慙慙

有屋穀穀方有穀民今之無祿天大
是祿寄夫富人哀此惻獨

十月之交八章

十月之交朔日辛卯日有食之亦孔
之醜彼月而微此日而微今此下民
亦孔之哀

十月之交八章

日月凶告其行不用不四國政無其良用不彼月而食則維其常此日而食而食不干何

の陽に勝臣の君に勝の理を以て理する。日月の凶告其行不用不四國政無其良用不彼月而食則維其常此日而食而食不干何。日月の凶告其行不用不四國政無其良用不彼月而食則維其常此日而食而食不干何。日月の凶告其行不用不四國政無其良用不彼月而食則維其常此日而食而食不干何。

爆々々震電寧々不令不百川沸騰山冢峯崩高岸為谷深谷為陵哀今之人胡惜莫

の光の食の理の常。爆々々震電寧々不令不百川沸騰山冢峯崩高岸為谷深谷為陵哀今之人胡惜莫。爆々々震電寧々不令不百川沸騰山冢峯崩高岸為谷深谷為陵哀今之人胡惜莫。爆々々震電寧々不令不百川沸騰山冢峯崩高岸為谷深谷為陵哀今之人胡惜莫。

皇父卿士番維司徒家伯冢宰仲允膳夫聚子内史蹇維趣馬搗維師氏

皇父卿士番維司徒家伯冢宰仲允膳夫聚子内史蹇維趣馬搗維師氏。皇父卿士番維司徒家伯冢宰仲允膳夫聚子内史蹇維趣馬搗維師氏。皇父卿士番維司徒家伯冢宰仲允膳夫聚子内史蹇維趣馬搗維師氏。皇父卿士番維司徒家伯冢宰仲允膳夫聚子内史蹇維趣馬搗維師氏。

維新馬橋の維新

師氏監妻燭方處

方處

監妻燭方處

天下の詔ハ時々とウガ

當時賢良人と不用ヤウ人

卿者附する士の官ハ字と皇父

の家伯と司掌と膳夫と仲允と内史

の聚氏より趣馬と蹏氏より師氏

の擣氏より中より美人褒似の顔色

追ふんく艶うりくんと以て妻と

此皇父豈曰不時胡為我作不即我

謀徹我牆屋田卒汙萊曰予不戕禮

則然矣

居城と向と地とつとゆとらん

之と刺と時と詩と抑との皇父が心

民とつと時と節と不と日と

我が身と作と即て謀詠もな

不の屋牆と徹て田地卒くらん

汚すん萊と耕作もてらん

天子の勤と再と戦と

然矣

皇父孔聖作都于向擇

三有事亶侯多藏不憖遺老俾守

經典餘師

詩經卷之五

三十一

汙萊と曰予戕

ハ不禮則然

皇父孔と聖都

于向と作三有

事と擇て亶

侯多藏憖て一

經典餘師

詩經卷之五

三十一

老と遺我
王と守俾不車
馬有と擇て居
と以て向は祖

黽勉事に従
て敢て勞と
告不罪無辜無
讒口囂々
下民之尊
天自降之罪
咎背憎職競人
由

悠々我里
亦孔之痛四
方有美我獨憂
居民逸不
休不天命徹
不我敢て我
友の自逸す
一倣不

我王擇有車馬以居徂向皇父人

作て三有事の役とて人け曹侯の
怒る老功の徳とて人け曹侯の

馬車とて人け曹侯の
已る但て居る向の地へ○黽勉從事不

敢告勞無罪無辜讒口囂々下民之
孽匪降自天噂沓背憎職競由人

罪辜も難るものぞ讒言囂々下民
の禍孽讒言惡口の噂沓なりて前

好るる背憎るる由競るる
悠悠我里亦孔之痛四方有美我獨

居憂民莫不逸我獨不敢休天命不
徹我不敢倣我友自逸

孔之我里四方の人々の痛
獨憂る居る民を逸すのみ

我の心も休む如く天命の
命令もかくす不徹とて

雨無正七章

雨無正七章

周の天子の道は

刺し雨の天子の仁恵は降るるもの
よ天子の政令正しくしとて雨
正しくしとて無き人なり故の
初雨極り無稼穡と
傷

浩浩昊天其德駿不饑饉之降喪
四國昊天疾威弗圖弗有罪
既伏其辜若此無罪淪胥以鋪

浩浩昊天不駿其德降喪饑饉斬伐
四國昊天疾威弗慮弗圖舍彼有罪
既伏其辜若此無罪淪胥以鋪

て以て鋪

凶年饑饉の降るる民
四方の国と斬伐の元天
民と災を以て稱する
天下と疾威のふが
依て政道もふが
淪胥て明りしとて
○周

周宗既滅止
大夫離居
我勸三事大夫莫肯
夙夜邦君諸侯
莫肯朝夕庶曰式
覆出為惡

宗既滅靡所止戾正大夫離居易知
我勸三事大夫莫肯夙夜邦君諸侯
莫肯朝夕庶曰式滅覆出為惡

哀哉言不能言
不舌是出維躬
維躬是瘁奇
能言巧言
流如射
木之虞俾

維于仕孔棘且
使不可云
罪于天子云得
亦使可云
怨朋友及

爾入王都于遷
謂曰子未
室家有鼠
思泣血言
疾不無昔
爾出居誰
從子爾
室之作

哀哉不能言匪舌是出維躬是瘁奇
矣能言巧言如流俾躬慶休

維曰于仕孔棘且
殆云不可使得罪于天子亦云可使
怨及朋友

謂爾遷于王都
曰子未有室家鼠思泣血無言不疾

昔爾出居誰從作爾室

難とてそこの僚友も世の中の
王とて都

滄滄訛訛亦孔之哀謀之其臧則具
之具是違謀之具是依我視謀猶
伊于胡底

我龜既厭不我告猶謀夫孔多
是用不集發言盈庭誰敢執其咎如

匪行邁謀是用不得于道

是與誰敢其
咎與執行邁
匪行邁謀是用不得于道

哀哉猶匪先民是程

○哀哉為猶匪先民是程匪

小宛六章

宛々彼鳴鳩
翰飛戾天
我心憂傷
念昔先人
明發不寐
有懷二人

小宛六章

肝要なり其の知るるものなり其の
智者の世のきこえたるものなり
水と履とくは深淵と臨むとくは
詠ふは雅の詩の宛の詩

宛彼鳴鳩翰飛戾天我心憂傷念昔
先人明發不寐有懷二人

彼鳴鳩とて大夫とてうれとてうれ
天下と治んとするに成難ははとて

念昔先代の能世と治る人々のこと
文王武王の二人と懐くことなり

人之齊聖飲酒溫克彼昏不知壹醉

日富各敬爾儀天命不又

酒色は醜人の徳とて酒と飲して
温柔とて心の歌といふは克て懐戒

富日とて日とて日とて日とて日とて
儀礼と敬むことなり天命とて

○中原有菽庶民采

中原有菽庶民采

彼脊令と題ぐ
載ち飛載ち鳴
我日は斯萬而
月は斯征夙は
興夜は寐て爾
の所生と忝し

交々々々桑扈
場々率て粟
と啄い良我填
寡岸々宜く獄
宜く粟と振
て出てトモ何
自能穀ん

穀似之
之原
と米の中
と蔵
と知
と民
今

日道よりいんご桑木より生ずる蠅
 蛉の子と螺贏と抱て我々子

依て似我とりようちり各々再

くらゐの子息どもと教訓して導引（導引）誨（誨）
 ちば善道より行ひしむるなり（なり）
 穀とを式し之と似（似）
 ぐりやうと
 ○題彼者令載（令載）

飛載鳴我日斯邁而月斯征夙興夜寐無忝爾所生

願くは朝廷の士大夫各々其の職と役と
 勤るに而して服するに勤むるを以て
 風を興越居進退は其の如く父
 母先祖と忝むるの無きを以て生ず
 所と云ふ已が父母の如く

交交桑扈率場啄粟哀我填寡官岸
宜獄握粟出卜自何能穀

とらんば場より率にて粟と啄
りてちりきこもの小鳥は肉食なり
とらんばこのやうなまじりたりし
も今に我躬より下るる食も
たぐらるるよしとば誠ふだ平の代と
して困窮のものとして救ふべき第一

温々々々恭人
木于集于如
惴惴于谷
戰兢兢兢如履薄水
惴惴于谷
戰兢兢兢如履薄水

小弁八章

言部
温々々々恭人如集于木惴惴小
心如臨于谷戰戰兢兢如履薄水
今の世に君子の徳温々々々若くは危
木に集り墜しする如く入心
惴々々々人皆戰々兢々て薄氷
の畏る

小弁八章

幽王の皇后太子宜
咎と生み後

寢似てやうに伯服と生み
依て王の寢似の諷より太子と
うして伯服と立んとし
うして詩人らんと刺す

弁々々々彼譽斯
歸飛提提民莫不穀我獨
民穀不穀我
獨于罹何
天于辜我
罪伊何心之
憂云云之
如何

蹢躅周道
鞠于茂草

弁彼譽斯歸飛提提民莫不穀我獨
于罹何辜于天我罪伊何心之憂矣
云如之何
提々々々いんば誠より又子親族の
の道に親子の我獨に穀善かぬ
我罪伊何よりて天の心憂
如何
○蹢蹢周道鞠為

為我心憂傷
惄焉如擣
假寐永嘆
維憂用老
心之憂矣
疢如疾
首之疾如

維桑與梓
必恭敬止
靡依靡
匪
之生我我
辰安在

之我我生我
辰安在

菀彼柳斯
鳴蜩嘒嘒
有漙漙
彼舟流
不知
所屆
心之憂矣
不遑假寐

經典餘師

茂草我心憂傷
惄焉如擣
假寐永嘆
維憂用老
心之憂矣
疢如疾
首之疾如

○維桑與梓必恭敬止
靡依靡
匪
之生我我辰安在
父靡依匪母不屬于毛不離于裏矣

○菀彼柳斯鳴蜩嘒嘒
有漙漙
彼舟流不知
所屆
心之憂矣不遑假寐

詩經卷之五

鹿斯之奔維足
 伎々々々雉之
 朝雉尚其雌
 求彼壞木の
 疾用て枝無
 譬心之憂矣
 寧莫之知と
 莫

物とのくはらうとて 塲如のらる
 只我の身と安ずるに
 假寐の心の違ふに
 浮舟の届所をいふに
 鹿斯之奔維足伎伎雉之朝雉尚求
 其雌譬彼壞木疾用無枝心之憂矣
 寧莫之知 鹿の奔の疾くはらうとて
 自然伎々々々雉の朝
 唯の雌と求むるに
 我の鳥けのすめくはらうとて
 樹木の疾くはらうとて枝葉
 憂ふと誰の知人の莫と
 寧莫之知と

彼投兎と相
 尚或之先
 有行死
 有尚或
 堊君子心
 兼維其之
 心之憂矣
 既之頂

君子讒と信
 或之醜
 如君子惠
 不之舒究

相彼投兎尚或先之行有死人尚或
 堊之君子兼心維其忍之心之憂矣
 涕既隕之 置とて兎と投
 先の行の救ふ人の死をいふ
 人情の行の人の死をいふ
 堊の人の心は仁心なり
 堊の天下を治る君子の心
 兼とて不仁とて心むるに
 思ふ心憂ふ涙隕てて道理をいふ
 ○君子信讒如或醜之君子不惠
 不舒究之伐木摘矣析薪地矣舍彼

不木と伐し、
薪と析
と地と、
罪有と舎て予
之他

高莫浚
泉匪
子易言
我梁

無我苟
無我躬
不我後
違

巧言六章

悠々昊天
父母且
無罪無辜

有罪予之佗矣

君の子と幽王と、
今の天

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

子佗人、
以て醇醪
を酌み、
を置て、
薪と析、
を王の
に彼罪、
予も、
莫高匪山、
耳屬于垣、
不聞、
違恤我後、

巧言六章

君の子と幽王と、
今の天

悠々昊天
父母且
無罪無辜
亂如

如く憚なり昊天已ど威なり予慎罪無昊天泰と憚なり予慎事無

亂之初て生ど替り初の始既涵涵るる君子如社亂底

いん過已ん

君子屢盟亂是用長君と用て長ど君子盗と信と亂

此憚昊天已威予慎無罪昊天泰憚

予慎無辜 昊天の世界と憚るに万民の

の罰利生するに威なり初て予常道と守り慎罪昊天の威

初生諸始既涵亂之又生君子信讒

君子如怒亂底過沮君子如社亂底

過已 凡て世の乱生むる初に王君

生とるに君子の讒言と信

いん過已ん 今世の君子も

いん過已ん 君子徳の人と社

○君子屢盟亂是用長君

子信盜亂是用暴盜言孔甘亂是用

飲匪其正共維王之叩 君子の叩

い其法らるるの盟と牛の血

僭偽の生するもの盟と君子人

と信しるるに讒と盜と

豫と盜との言の利ロクと

彼何人斯胡
其聲聞我
身不見人干
愧不人天于
畏不人

彼何人斯其
飄風為胡
自不胡
自不胡
梁不胡
我心

爾之安行亦舍
之亟行爾の車
脂する皇
壹者
之來云何
其肝

爾還て而入
我心易也還
而へ不否知
難也壹者
之來我
俾也

經典餘師

持經卷之五

三十九

我不可言思
○

彼何人斯胡逝我陳我聞其聲不見

其身不愧于人畏于天

又

躬人見

○彼何人斯其為

飄風胡不自北胡不自南胡逝我梁

祇攪我心

○

爾之

安行亦不遑舍爾之亟行遑脂爾車

壹者之來云何其肝

の遑

人

爾還而入我心易也還而不入否難

知也壹者之來俾我祇也

入

心

伯氏堦伯氏堦と吹仲氏氏堦と吹仲貫貫と知不我我と知不三物三物と出爾爾と詛

鬼鬼と為得得と不可面面と目極極と好

歌歌と作反側反側と極

巷伯七章

姜姜と今斐斐と今是是と貝貝貝と成錦錦と成人人と諧諧と者者者と亦亦亦と已已已と

經典餘師

伯氏吹堦伯氏吹堦

堦仲氏吹堦及爾如貫諒不我知出

此三物以詛爾斯伯氏吹堦仲氏吹堦

三の物三の物詛詛爾爾斯斯伯伯仲仲氏氏吹吹堦堦及及爾爾如如貫貫諒諒不不我我知知出出

為蜮則不可得有覩面目視人罔極

作此好歌以極反側

作作此此好好歌歌以以極極反反側側

巷伯七章

巷巷伯伯七七章章

姜姜今今斐斐今今成成是是貝貝錦錦彼彼諧諧人人者者亦亦已已

詩經卷之五

大甚

大甚ハナハタ 此の次第に人々を説く語の

と重なりてつる目まじきハナハタ 義なり古の錦の宝財を織

入るハナハタ 義なり古の錦の宝財を織

すハナハタ 大甚

南箕彼諸人者誰適與謀

多兮修兮是

南箕ハナハタ 箕星の星のふり四つて

説言のくせりハナハタ 小の如く廣く

大の害ハナハタ 害の如く

○緝緝翩翩謀欲諸人

慎爾言也謂爾不信

諸人々々

人々々々

人々々々

人々々々

捷捷幡幡謀欲諸人

女遷

人々々々

○驕人好好勞

人草草蒼天蒼天視彼驕人矜此勞

多兮修兮是南箕と成彼人々と諧する者誰適て與謀

緝々翩翩謀欲諸人

人々々々

捷々幡々謀欲諸言也謂爾不信

驕人好好勞人草々蒼天蒼天彼驕人と視て

此勞人と矜ま

彼人と諧する者い誰に過て
 與へ謀彼諧
 人と取て豺虎
 二投界へ豺虎
 食せ不有北
 二投界へ有北
 受不有昊
 二投界へ

人

と好々々て善人につぬは心気苦勞の

蒼草

如^{ごと}く
 照^てる^るもの
 天道^{てんどう}の
 神^{かみ}の
 何^{なん}れ^いも
 彼^かの
 驕^{あはれ}人^{ひと}
 蒼^蒼

困乏の

窮の人はと務哀め、
苦勞の彼

譜人者誰適與謀取彼譜人投界豺

虎豹虎不食投畀有北有北不受投

界有昊

人にとらるゝ一説者ゝと誠
世のすゝりゝものゝすゝりゝと

なるといふもこの識者
 といふと諸たぐむところ
 誰の與
 如此の人

人のまゝのまゝに虎豹狼の群とも

食^じて受^うま^けず^き飲^のみ^やば有^ある北^{きた}り
五穀^{ごこく}生^{せい}ぜ^ろれ無^む益^{えき}の土地^{とち}へ捨^すてら^る

万物と生あるも受入る根本なるべし受あ

ぞりつふちんハ哭天く入りくく擬ぎ
 罪つみとほろくくくくをを救きうふふなり
 ○

楊園之道猗于畎丘フナヒラ寺人孟子フナヒラ作為

此詩凡百君子敬而聽之

揚チヤウの園エンの

名^なより畝^{うし}丘^{かみ}の畝^{うし}丘^{かみ}と
名^なる^る^る^る^る揚^{やう}園^{えん}の畝^{うし}丘^{かみ}と

ちんとしてゆくより 高位の人と諛言
ちんとするのみいつも 君主の御身うちと

人と抱りてゐるものゝと
我いよ君の執人とはと

わづらわ我わらうる巷伯某の諷言
らふふとふん忍ずてこの詩と作

敬んぐその道理とてうらゝめんとて

谷風三章

習々々谷風
維風及雨將恐
將懼維予予女
與將安將樂
女轉予予

谷風三章

朋友の交情のふれ
詞よりむ

習習谷風維風及雨將恐將懼維予

與女將安將樂女轉棄予

谷風の習
君より

習々々谷風
維風及雨將恐
將懼維予予女
與將安將樂
女轉予予

轉棄予予
○習習谷風維

將懼予予懷
寘將安將樂
予予棄予遺
如予

風及雨將恐將懼寘予予懷將安將
樂棄予如遺

恐懼と身の時も予と懐抱し入
寘の安樂より予と遺棄する今

習々々谷風
維山の崔嵬草
不不無木
大德と忘我
小怨と思

○習習谷風維山崔嵬
無草不死無木不萎忘我大德思我

小怨

萎する草木もいつしも朋友の死
とす親しき一且根もそれ小怨の怨

蓼莪六章

蓼々莪者
我我匪伊蒿
哀々父母
我我生で劬勞

蓼莪六章

世母と申すは民の母と申すは

詞と速

蓼蓼者我匪我伊蒿
哀々父母生我
劬勞
我我嘉州
我の州
蓼々莪者
我我生で劬勞
哀々父母
我我生で劬勞

蓼々莪者
我我匪伊蒿
哀々父母
我我生で劬勞

餅之馨美維
疊之恥
民之生不如死之
父無何
人母無何
特人出則
恤と衙入則
ら至と靡

勞瘁
上の心
萬の大
餅之馨美維疊之

恥鮮民之生不如死之
父無何
特人出則衙入則靡至
餅之馨美維疊之
酒の馨美維疊之
餅の酒つゝぬれぬ
酒の馨美維疊之
餅の酒つゝぬれぬ
酒の馨美維疊之
餅の酒つゝぬれぬ
酒の馨美維疊之

世に生へくものに鮮く独ど
 りて死て久くやうしものよ
 まりしを父母の怙恃より出
 も入る心は恤と銜て歸至る靡
 り○父兮生我母兮鞠我拊我畜我
 長我育我顧我復我出入腹我欲報
 之徳昊天罔極
 兩親の苦勞を報むるに及ばず
 成長するに育むるに及ばず
 出入るに及ばず
 腹抱ふに及ばず
 顧るに及ばず
 復すに及ばず
 欲するに及ばず
 報むるに及ばず
 昊天の徳は罔極なり

南山烈烈飄風發發民莫不穀我獨何害

遭^タ遇^ウく不^レ救^スもの莫^モ中^{ナカ}に我^ガの
何^{ナニ}故^ユと身^ミの○南山律律飄風弗弗^{フフ}
害^{ガイ}らるや
民莫^モ不^レ救^ス我獨^{ワカ}不^レ卒^{ソツ}
の詩^シの
律^{リツ}も烈^{リョウ}

東國の諸侯を
の役と事賊征ふ之

有餘ハカ食カ養ヤウ有リ採サイ棘セキと周道如砥シ其レ直チキ

有周道砥の如く其直と天子の履如く君子の履所小人の視所瞻て言ふ之と顧る潜焉とて涕と出と

小東大東杼柚其空糾糾葛

葛屨以て霜と履可桃々公子彼則行と行既往既來て我心と疚使

有列沝泉無浸獲契々々て梧人其獲薪也新可也哀我憚人亦息可也

如矢君子所履小人所視瞻言顧之

潜焉出涕古の天子恩をうけずいひ

儀儀の木の心とけり朝聘の君子が年貢

道平周の道とゆるとゆると矢

愛の如く當時天子の諸侯と

の小人の視上君子の履行と下

何とと潜顧るにも世のやういふもの

りる

○小東大東杼柚其空糾糾葛

屨可以履霜桃桃公子行彼周行既

往既來使我心疚東がの国だ

国布と以てこの国の産物

して国杼と柚と空と糸の経緯

と履とあるとぬとのうへ天子の僕

事心も疚つゝんぬる

有列沝泉無浸獲

薪契契悲歎哀我憚人薪是獲薪尚

可載也哀我憚人亦可息也

繁々として衣服のたぐいと極々くんの船

東人之子職勞不來西人之子粲粲

用はる人も苦勞を息やぐべしとある。○

難^{ナニ}哀^{アハレ}と^と車^{クルマ}に^に載^{ノリ}て^て獲^{トク}て^て家^{イヘ}の^の

依て人々を憚り我人との契々を寤

高^{たか}の困^{くわん}嘉^かの止^{とど}と又^{また}上^{あが}と以^{もつ}て澤^{さわ}の国^{くに}の天^{てん}

水みづ 泡うめ いい けけ 泉いづみ ちち 獲とく ちち 薪きん 浸ひ ちち の

A vertical strip of a manuscript page, likely from a Chinese text, showing a column of text in traditional Chinese characters. The text is written in black ink on a light-colored, aged paper. The strip is narrow, showing only a portion of the original page.

其長維天有漢監亦有光跂彼織女

或以其酒不以其漿
朝朝佩璫不以

上人は百億の重身となりて試用しき

人の心も熊鷹の裘服の好と着權門
家の私より人々いりてききと

粲々として衣服の光りて極むるの飾

百姓是言と云て都へ来けり

百療是試 二 東國之子 三 職王苦勞

東人之子。耶婆不冬西人之子。
文服奇人之子。能羅是長。弘人之子。

東人之子ハ識勞ヲ來リ百人之子ハ繁ニ榮ニ

薪ハシは、ハシを車クルマに載ノセて、家の

懾る我人との契々ふ嘉

の困窮の上より賦役をく

水は浸るとすれをひくちり浸るとい

言
い
の
泉
の
獲
の
薪
の

則ち七襄す
雖報章と成
不睨彼牽
牛以て箱と服
不東と啓明
有西と長庚有
揀と天畢有
戴と之と行と
施と

彼牽牛不以服箱東有啓明西有長
 庚有挾天畢載施之行
 雖則七襄不成報章曉

維南ノ箕有以て簞揚と可_レ不_レ
維北ノ斗有以て酒漿と挹可_レ
不_レ維南ノ箕有_レ載_レい_レ其古と
翕_レ維北ノ斗有_レ西ノ兩と之掲

物もともていふ心も天の
 行なり施ちて餘りて心く
 ら天子の天下と治りて世の益
 諸官人も名のいふて世の益
 〇維南有箕不可以簸
 揚維北有斗不可以挹酒漿維南有
 箕載翕其舌維北有斗西柄之揭
 上の心も南方の箕といふ星
 ちんども米糠と簸揚とひつと
 能もちて又北方の斗といふ星
 うれいも酒漿と挹くといふも
 〇箕の星のいふての
 舌と翕てさひつとひつと
 〇箕の星のいふての
 〇箕の星のいふての
 〇箕の星のいふての

四月八章

四月八章

時の乱景
狼藉とて

四月維夏六月
徂暑先祖匪人胡寧

四月維夏六月徂暑先祖匪人胡寧

匪予忍予

忍予

予忍予

予忍予

秋日凄凄

秋

百卉具腓

日凄凄百卉具腓

離瘼美其適

日凄凄百卉具腓離瘼美其適

其適歸

歸

冬日烈烈

日烈烈

飄風發發

日烈烈飄風發發

民莫不穀我獨何

日烈烈飄風發發民莫不穀我獨何

害

害

莫我何

莫我何

山有嘉卉

山有嘉卉

栗侯梅廢

栗侯梅廢為殘賊

莫知其尤

莫知其尤

彼泉水相載

相彼泉水載清載

蜀我日禍
構曷云能
穀

泊江漢
南國之紀盡
瘁以仕寧
我與有

鷄匪
天辰
匪
潜淵
人

濁我日精禍曷云能穀

今上
濁
利歌

穀時節
○

泊泊江漢南國之紀盡瘁以仕寧莫

我有
地

河
民
守

地
我

○匪鷄匪鷄翰飛戾天匪鱣

匪鱣潛逃于淵
鱣

天
水淵
潛逃

我
身
害

○山有蔚薇隈有杞桷君子

作歌維以告哀
蔚薇
杞桷

易
依
君子

哀
詩

詩經五之卷終

